

『枕草子』における音・声の研究

—「忍びやか(に・なる)」をめぐる—

李 暁 梅

はじめに

『枕草子』では「忍びやか(に)」は八つの章段にわたって、十二例が表出されている。しかも、この十二例はすべて音声行為を描くものである。先学は、清少納言は物を隔てて捉えて、奥ゆかしい「しのびやか(に)」の美意識を表現している。即ち、「しのびやか(に)」が音声の様相を表すところから、具体的な挙動のさまへとその表現性を広げてゆくことの過渡期にあつて、両者を融合させたかの態を示している点で、独自の感性世界を作っている、との指摘をしている(大槻美智子「みそかに」「しのびて」「しのびやかに」の語義と文章表現——『源氏物語』とそれ以前⁽¹⁾)。

本稿では、まず、『枕草子』に出ている「しのびやか(に)」の語意と文章表現を確認し、「しのびやか(に)」が特どのような内容について用いられ、そしてどのような意図で様々な音声行為を表現しているか、『源氏物語』と比べて『枕草子』における「忍びやか」な音響の独自性を新たに考えてみたい。

— 「忍びやか(に)」について

「しのびやか(に)」は動詞「しのぶ」の連用形「しのび」に、形容的性格をもつ接尾語「くやか」が加わることにより構成された「形容動詞」の連用形である。『類聚名義抄』では、「密」に「シノビヤカナリ」、「ヒソカニ」と二種の訓が記されている。⁽²⁾「物事が、目立たないさま。また、人にさとられぬように、こっそりと動作をするさま」という意である。しかし、築島裕博士が「訓読では、「内密に」の意を表はすのに、すべて「ヒソカニ」を用いて、「みそかに」「しのびて」「しのびやか」などの例は未だ管見に入らない」と言われているように、⁽⁴⁾「しのびやか(に)」は、一般に和文において用いられるということがわかる。

「しのびやか(に)」は、平安時代初期の文学作品『竹取物語』・『土佐日記』・『伊勢物語』には見られないが、『枕草子』以外、『大和物語』には一例、『落窪物語』には三例、『宇津保物語』には七例、『かげろう日記』には六例、『紫式部日記』には二例、『源氏物語』には六十三例、⁽⁵⁾表出されている。大槻氏は「隠す意識でこっそりと行うことを表す」「みそかに」、他者に憚る気持ちを持つてする「しのびて」などの類義語と比べて、「しのびやか(に)」は、専ら、音声や振るまい方の「物静かな」さまをいうのであって、「隠す」とことと直接に結び付くわけではない。ただ、その振る舞い等が、往々にして、人目にたたぬようにとの意識でなされることがあり、⁽⁶⁾と言われ、そして音声行為についても、「すでに当時の貴族階級——ことに女性——の間に共通の美意識はある程度芽生えていたかもしれない」と推測されている。

『枕草子』にも「みそかに」「しのびて」と「しのびやか(に)」の用例があつて、それぞれについて各一例をあげてみる。

① 殿の御方より侍の者ども、下衆などあまた来て、花のもとに、ただ寄りに寄りて、引き倒し取りてみそかに行く。

(二六〇段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」三九九頁)⁽⁶⁾

『枕草子』の中、道隆の一家の盛事を記した最も長い章段の一節である。中宮のために造営した新邸の御殿の中央にある大きな桜の造花が雨で汚くなった。汚れた花を人目にさらすことを避けるために、道隆が夜半に隨身たちに移動させた。右は隨身が花を移している場面である。中宮と中宮の周りの女房に内密にした計画なので、隨身たちはこっそりと持っていくのである。

② しのびて来る人見知りてほゆる犬。

(二六段「にくきもの」六六頁)

人目を避けてこっそりと恋人の所にやってきた人を見つけて吠えたてる犬。人に知ってもらいたくないことなのに、ワンワンと吠える声^{こゑ}が人に知らせることになる。吠える犬は憎らしい。

③ まいて、臨時の祭の調楽^{てうがく}などは、いみじうをかし。主殿^{そのもり}の官人、長き松を高くともして、頸は引き入れて行けば、先はさしつけばかりなるに、をかしう遊び、笛吹き立てて、心ことに思ひたるに、君達^{きんだらひ}昼の装束^{きさうそく}して立ちとまり、物言ひなどするに、供の隨身どもの、前驅をしのびやかに短う、おのが君達の料^{れう}に追ひたるも、遊びにまじりて、常に似ずをかしう聞ゆ。

(七三段「うちの局」一三〇頁)

賀茂の臨時の祭の調楽の場面である。優雅な音楽の中、上達部たちが正式の服装で、立ち止まって、女房たちと話などをする。その都度、隨身たちは本来ならば、鋭く発すべき払い声を、ここでは低くして(松尾聡「先をしのびやかに短う」、自らの主人の身分にに応じて、丁寧⁽⁷⁾に先を追っている。隨身の払い声も演奏に交じって、いつもと違って心地よく聞こえる。

もともと、人を誡め、威儀を正す雰囲気をもたらし「前駆を払う」儀式は、この場面ではいかめしさが和らげられ、さらに風情のある事柄として捉えられているのである。「しのびやかに」には随身たちが調楽に遠慮をしつつ前駆を追う意識が託されている。随人たちの細やかな気配りによって発した音声、調楽に合奏した音響となる。この楽音を作者は「をかしう聞ゆ」と、美的に評価している。作者が雰囲気の変異の意外性を喜び、音感的な視点から物事を観察する意識は強烈である。

しかし、『源氏物語』に現れている「前駆をしのびやかに追う」場面は、主に鋭く払う声を低くさせる意を表しているように思われる。例えば、薫が横川の僧都の話聞いた後、一行が坂本にやってきて、薫は「今夜のところは、小野の人々にも知られずに通過しようとの配慮」で、前駆の人々に「しのびやかにを」と言った（『夢浮橋巻』）。つまり、音を立てないように行動することのみを強調しているのである。

このように、『枕草子』における「しのびやかに」は、「みそかに」「しのびて」と異なって、意識して音を立てないように配慮する振る舞いを表出し、このような音声行為を賞賛する作者の姿勢が明確になる。

では、『枕草子』における「しのびやかに」の場面には、どのような特徴が指摘できるのであろうか。これについて、男女の逢瀬の場面、女性が古歌を誦じる場面、物隔てて聞く場面を通して考えてみたい。

二 忍びやかに門をたたく

『枕草子』の「しのびやかに」の十二例を眺めてみると、男女の逢瀬に関する内容が最も多く、四例がある。「しのびやか」な男女の逢瀬を賞賛する清少納言の見方がうかがえる。

平安時代の男女の間は「忍び」の恋愛である。女の所へ通う時は、なるべく人目を避けて、音を立てないように振る舞うのである。作者は逢瀬の様々な動きの中、特に男の登場の第一行為——「門を叩く」ことに注目する。

女迎ふる男、まいていかならむ。待つ人ある所に、夜すこしふけて、しのびやかに門たたけば、胸すこしつぶれて、人出だして問はするに、あらぬよしなき者の名のりして来たるも、かへすがへすもすさまじといふはおろかなり。

(二三段「すさまじきもの」 六〇頁)

「しのびやかに」は門の叩き方を表すのであるが、一面、男が息を殺すように振る舞うことをも意味している。つまり、来客の第一行為はいつもと変わっていない。だからこそ、後の「胸すこしつぶれて、人出だして問はするに」の感動と行動が生ずるのである。しかし、期待が外れて、関係のない人が名前を告げている。これは、大変悔しいことである。

ここでは「しのびやかに」門を叩く「音」と、縁のない人の「名のり」の「声」とを同時にかつ対照的に捉えている。希望と失望という相反した二つの心の動き、即ち待たされる側の興ざめの気持ち、来客のこの連続した音声行為によって鮮明となる。

続いて、もう一例を挙げてみる。

宵うち過ぐるほどに、忍びやかに門叩く音のすれば、例の、心知りの人来て、気色ばみ、立ち隠し、人目守りて入れたるこそ、さるかたにをかしけれ。

かたはらにいとよく鳴る琵琶のをかしげなるがあるを、物語りのひまひまに、音も立てず、爪弾きに掻き鳴らしたるこそをかしけれ。

(一八四段「南ならずは」 三三二頁)

夜九、十時ころを過ぎると、ひそかに門を叩く音がする。いつものことで、彼が来ている。女は、気を張って、立ち現れて、彼の姿を隠す。人に見られないように入れる。それ相應に振舞っている二人の姿が、実にすばらしい。かたわらには、音色の良い、たいそう立派に作った琵琶がある。話の合間合間に、さりげなく、音も立てないで、指先で弦を弾く。これこそ、風情がある。

心は一つ、互いに心を通じる逢瀬である。男性は中の女性にしか聞こえないように心を配って門を叩く。音の直後の女性の対応も良い。すぐ扉を開けて男性を入れる。時には琵琶を爪先で弦を掻き鳴らすのも、貴族的であり、優雅である。この状態は、作者が理想とした逢瀬の有様である。

音を押えて門を叩く。音を立てないで琵琶を掻き鳴らす。つまり、あたりに配慮してなるべく音を消すように振る舞う男が作者に賞賛される。

このように、来訪者が現れる第一場面では、門の叩き方が重要視されているようである。気配りをもつて叩くか、そうでないかがポイントである。

例えば、七三段「うちの局」には「ただ指^{おび}一つしてたたくが、その人なりと、ふときこゆるこそをかしけれ」(二二八頁)が出ている。耳立たないように、唯、一本の指だけで叩くことを言っている。

その一方、「門を、いたうおどろおどろしく叩けば」で表現される乱暴な音は作者によつて否定されている。例えば、則光との関係を回想したときに、次のように彼を登場させている。

夜いたく更けて、門を、いたうおどろおどろしく叩けば、なにの、かう心もなう、遠からぬ門を高く叩くらむとききて、問はすれば、滝口なりけり。「左衛門の尉^{じょう}」とて文を持て来たり……

ここに「おどろおどろしう」「門を高く叩くらむ」とあることによって、門を叩く音がいかにも騒がしいことがわかる。門を叩くことで登場人物の人間性が現れてくる。「なりけり」には滝口だからこそ門を「おどろおどろし」く叩く意味が込められている。すると、滝口則光に対する作者の一貫した見方が反映されてくる。作者にとって、来訪者の第一行為——門を叩くことによつて生じる音響はその行為者の教養・人格を判断する規準の一つである。

このように、「しのびやか(に)」は貴族社会における上品さを表している点で、重要なキーワードとなる。この言葉には作者の理想とした男性像が託されているし、そして、理想の途漸を判断する基準となつていふと思われる。なぜなら、その反面、作者が無神経な男性のしぐさに対してなみなみならず憎んでいて、この憎らしい気持ちで、「にくきもの」の段に集中的に出ているからである。

あなたがちなるところに隠し伏せたる人の、^{いびき}軒したる。また、しのび来るところに、^{ながえぼし}長烏帽子してさすがに人に見えじと、まどひ入るほどに、物につきさはりて、そよるといはせたる。伊予簾^{いよすだり}などかけたるに、うちかづきてさらさらと鳴らしたるも、いとにくし。帽額^{もづか}の簾^すは、まして小端^{こは}のうち置かるる音、いととしるし。それも、やら引き上げて入るは、さらに鳴らず。遣り戸を荒く^た開て開くるも、いとあやし。すこしもたぐるやうにして開くは、鳴りやはする。あしう開くれば、障子なども、こほめかしうはとめくこそしるけれ。

(二六段「にくきもの」 六七頁)

人の目を忍んで、女のところに来た男が、あたりに注意をせず余計な音を出してしまつて、実に憎らしい。例えば、止むを得ず無理な場所に隠して寝させておいた男が軒をかいてしまう。また、長烏帽子を被つて、顔を隠そうと思つたのに、慌てて中に入ろうとする時、物に突き当たつて、「そよそよ」と音がする。伊予簾などの掛け物には帽子類が当たつて、「さらさら」と音を立てても、にくらしい。帽額^{もづか}の簾^すの場合は、まして中に小端の置かれてゐる音も一

段と大きくする。氣をつけてそつと引き上げて入れれば決して音は立たない。遣り戸を乱暴に閉じたり開けたりすること、作法が悪い。少し持ち上げるようにすれば、音などはしない。ひどく開けると、障子なども震動を受けて、ガタガタと倒れそうな音をする。

音を立てることが悪いという意味ではなく、男が周囲に配慮のないことを作者は指摘しているのである。このように、来訪者があれこれの音を立てる遠慮のなさ、センスの悪さを率直に批判することによって、作者の理想的な「しのびやか」な男女の逢瀬を求め、賞賛する気持ちが一層明らかになる。「しのびやか」な音響からは、貴族社会における女性の気持ちを理解する遠慮深い男性のイメージ、品のある男女の逢瀬の有様が伺われるのである。

三 女性がしのびやかに古歌を誦じる

清少納言は女性が古歌を誦じる場面を、「しのびやか（に）」で修飾している。

（前略）出づるかたを見せて立ち帰り、立部の間に陰に添ひて立ちて、なほ行きやらぬさまに、いま一度いひ知らせむと思ふに、「有明の月のありつつも」としのびやかにうち言ひて、さしのぞきたる、髪かしらの頭にも寄り来ず、五寸ばかりさがりて、火をさしともしたるやうなりけるに、月の光もよほされて、おどろかる心地しければ、やら出でにけり、とこそ、語りしか。

（一七三段「ある所に、なにの君とか言ひける人のもとに」三〇二頁）
風流人といわれる男は朝方、女の所を離れて去っていくが、立ち戻って何かを言いかけるような感じである。女のほう是有明の情景に合わせてひっそりと、柿本人麿の歌にある「在明の月のありつつも」を引き、自分の心情を詠ん

だ。しかし、ちょうどその時に、女の「髪は鬘であるために頭の地肌につき従って来ず、五寸ほどずり下がってその禿頭がむき出しになり、輝いているところに、九月ころの明るい月の光が射す、その無気味な様子に興がさめて男は帰ってしまった」⁽⁹⁾。この話は「有明の月」を焦点とし、前半で情調的、優雅で、後半は滑稽で、しかも皮肉でさえもある。風流な逢瀬を追求する男女に生じた滑稽な話であろう。作者は大いに滑稽的效果を引き立てるために、前半で最大限に情調的な雰囲気構築しているのである。

女性が男を見送り、目前の有明の月を眺めて、思わず柿本人麿の歌「長月の在明の月の有りつつも君し来まさは我恋ひめやも」(『拾遺和歌集』卷第十三・恋三)を口ずさんだ。もしあなたが「有明の月」のように有り続けて尋ねて来られるならば、わたしはこれほどまで恋しく思ひはしない、の意で、男に続けて尋ねてきてほしいという女性の切望を込めた歌である。男に聞かせるのではなく、自らの思いをもの静かに有明の月に向つて願っているのである。「しのびやかに」によつて、女性の優婉さ、心の底から湧いてきた願いのせつなさが表されている。

もう一つ、清少納言本人も「しのびやかに」古歌を誦じる場面があるので、それを挙げる。

殿おはしませば、寝くたれの朝顔も、時ならずや御覽せむと引き入る。おはしますまに、「かの花は失せにけるは。いかでかうは盗ませしぞ。いとわろかりける女房たちかな。いぎたなくて、え知らざりけるよ」とおどろかせたまへば、「されど、われより先にとこそ思ひてはべりつれ」としのびやかに言ふに、いととう聞きつけさせたまひて、「さ思ひつる事ぞ。世にこと人、出でゐて見じ。宰相とそことのほどならむとおしはかりつ」と、いみじう笑はせたまふ。(能因本には「しのびやか」が出ていない)

(二六〇段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」四〇〇頁)

一の部分で挙げた「みそかに」の例文の続きであるが、造花を移動させた翌朝、道隆が「かの花盗むは誰ぞ」を知

らないふりで、わざと「女房たちは寝坊をして知らないでいた」と言つて、皆を驚かせた。清少納言はその仕業を見透かして、ひそかに忠見の歌「桜見に有明の月に出でたれば我よりさきに露ぞおきける」の一節「我より先に」をひいて絶妙に即答した。「桜を見ようと思つて、有明の月の下に出て行くと、私より先に花びらに露が置いてある」「置き」に「起き」を懸けて、私より先に起きて桜を見た人がいた、という意味である。この歌を借りて、即座に知的に答えたのである。

後の「いと疾うさきつけさせたまひて」の文章から、作者が本気で関白道隆に聞かせるつもりで言つたのではなく、ただ単につぶやいただけで道隆にキャッチされたことがわかる。というより、むしろ、作者のような返事こそ関白道隆が期待していたのである。

作者は自分が古歌を口ずさむ様子を「しのびやかに」で表している。「しのびやかに」即答すれば、「打てば響く」主家の意図に即応し、優艶にして物静かに且つ優雅に対応でき、この作方以外に考えられないのである。主家に相應しい宮仕えであることを強調する一節であらう。

このように、「しのびやか(に)」には相手に聞かせる目的を明言しないが、にもかかわらず相手からの反応に対する期待が心の底に潜んでいる。女性が古歌を誦じるしぐさを「しのびやか(に)」で形容することによって、王朝特有の女性らしい柔らかさ、優婉さが独自的に表し出されているのである。

ところで、『源氏物語』には、「しのびやかに」誦じる、または言う、口ずさむ等の用例が多々出ているが、主人公・源氏と薫について描いた事例が大半である。例えば、女三宮と結婚した源氏は三日目の朝になると、紫の上に会いたくて、一番鳥の声とともに女三宮の元を抜け出していく。夜の雪が消え残り、砂か雪かが分からない。この風景を見て、源氏が白楽天の律詩『庾楼曉望』にある詩句「なほ残れる雪」を「しのびやかに口ずさみたまひつ」があ

る。紫の上への思いを述懐しているのであるが、ここでは、自分の心情を述べるにとどまり、紫の上に聞かせたい切望などは伝わって来ないのである。

四 物隔てて聞く（聴き方）

清少納言は成信の中将が、「蚊の睫の落つるをも、ききつけたまひつべうこそありしか」と、耳の鋭さについて高く評価している。音を聴くことで物事を判別することは王朝生活の最も大きな要件であつたとうかがえる。特に、視界が物に遮られた場合、周りに生じたさまざまな音・声は伝わってくる。誰それが、何をしているか、まるで見えるようにいろいろと想像を加えるのが清少納言の楽しみであつた。

まず、「正月にお寺に籠りたるは」の段を例にする。

この章段では、騒がしいシーンが連続して描かれている。そのうちの二コマを挙げてみる。

御みあかしの、常灯じやうとうにはあらで、うちにまた人の奉れるが、おそろしきまで燃えたるに、仏のきらきらと見えたまへるは、いみじうたふとくに、手ごとに文どもをささげて、礼盤にかひろぎちかふも、さばかりゆすり満ちたれば、とりはなちて聞きわくべきにもあらぬに、せめてしほり出でたる声々、さすがにまたまぎれずなむ。

「千灯の御ころざしはなにがしの御ため」などは、はつかに聞ゆ。

（二一六段「正月に寺に籠りたるは」二二三頁）

右は、仏前で多数の僧侶が多数の参詣者の祈願を引き受けて、同時に修法祈願する場面である。僧侶たちが参詣者たちの願文を手に捧げもつて、高座でかすかに身体を揺り動かして仏に誓願している。その声も大きく揺れ動いて、

堂内に充滿しているのを、誰のために祈願しているかを聞き分けることすらできない。また、僧侶たちが無理にしほりだしている声々は、そう言うもののまたほかの声に紛れないで聞える。「千灯のお志は、誰それの御ため」などは、ちらりと聞える。

正月のお寺は、まさに本文に言ったように、

「正月などは、ただいとさわがしき。物のぞみする人など、ひまなく詣づるを見るほどに、行ひもしらず」という雰囲気である。

このように、作者は騒がしい中、いろいろと観察している。しかし、このように普通に声を出して祈願する場合を見つめることがある一方、「忍びやかに」祈願する一人の男の様子に対して作者が格別に興味・関心を示した描写もあるのである。

かたはらに、よろしき男の、いとしのびやかに額など、立ち居のほども、心あらむと聞えたるが、いたう思ひ入りたる気色にて、寝も寝ず行なふこそ、いとあはれなれ。うちやすむほどは、経を高うは聞えぬほどに読みたるも、尊げなり。うち出でまほしきに、まいて鼻などを、けざやかに聞きにくくはあらで、しのびやかにかみたるは、何事を思ふ人ならむ、かれをなさばやとこそおほゆれ。

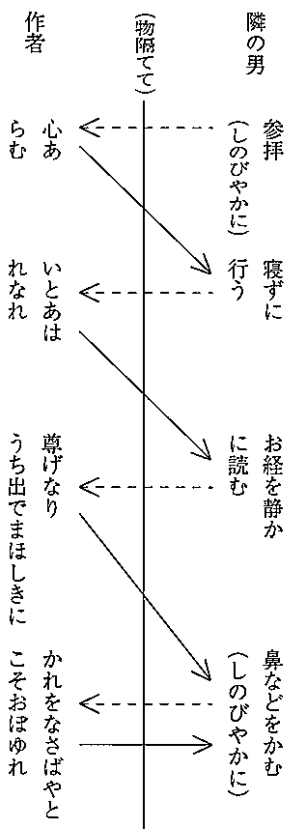
(二一六段「正月寺に籠りたる」二二三頁)

作者がいる局の隣に、貴族身分の男がいて、ひそかに額をつけて、立ったり坐ったり参拝するも、思慮のある人だなあと聞こえる。いかにも思いつめた感じで、寝もせず用心深くお勤めするのは、なるほどしみじみと感じられる。こちらが一眠りする時は、お経を高い声には聞こえないほど読んでいるのも、尊い感じがする。高い声を出して読んではしい気がするのに、まして鼻などは、声高く聞いて気持ちが悪いようではなく、ひそかにかむのは、何のこと

を祈願する人だろう、その願いを叶えてあげたいほどと思われる。騒がしい中、作者にとってこの一コマは貴重な発見だとは言えよう。

〔博聞録〕（管蠡抄・卷十）に「壁^{カベ}有^レ耳^リ牆^{カキ}有^レ縫^{ヌイ}」とあり、秘密が漏れやすいたえになっているが、隔壁と音声との間に興味を覚えるのは人間の動物的本能に根ざすからであろう。

ものが隔てられ、発生源である男の動きとその音声を受ける作者側との間では、音声とそれに対する反応が連続的に往復している。



右の図の通り、まず、向こうから音を立てないように祈願する男の行いが作者の耳に止まった。作者は男の真剣に祈願する様子を想像しながら興味を湧かせた。注意して傾聴してみると、男は心の底までひたっているようで、寝もしない。作者はそれを不思議に思い、加えて同情心が呼び起こされた。男は小さな声でお経を読み、作者はこの音声を尊く感じ、局から出てその姿を確かめようと思った。男が鼻などをかむ音がはっきりと聞こえた。音を立てな

いようにかんでいる。作者は男の祈願に想像をめぐらせ、できればその願いを叶えてあげたいとさえも思った。

隔壁の向こう側の「しのびやか」な音に、作者の耳が引き付けられ、向こう側の悲しみが伝わるにつれて、作者はますます心を動かされてしまう。このような往復によって、「しのびやか」さが持つかすかな音響の美しさが波打って伝わる。つまり、上品な遠慮深い音が隔てた壁の向こうから発信され、受信側はそれに共鳴する。次第にその多様な音を追っていろいろと想像をめぐらせる。このように往復する中、優雅な音の風景が呈されてくるのである。このような手法を用いたこの章段にはもう一例がある。

そよそよとあまた下り来て、大人だちたる人の、いやしからぬ声のしのびやかなるけはひして、帰る人々やあらむ、「その事あやふし。火の事制せよ」など言ふもあなり。

(同右 二三四頁)

ある年配の女性が女房たちに囲まれ、局から下りて来る。上品な声で、ゆつくりと降りる遠慮深い様子で、女房たちにもこれも注意しなさいと、一々言い付けている。

当然のことながら、物に隔てられると視線が遮られてしまう。すると、身の周りの人々の一挙手一投足に注意が行ってしまう。この章段では、特に「しのびやか(に)」振る舞いをする貴人でありそうな人々のことに作者の心が引き付けられているのである。

さらに、「物隔てて聴く」という手法を用いて構築している典型的な場面は「心にくきもの」の章段にある。

物へだててきくに、女房とはおほえぬ手の、しのびやかにをかしげに聞えたるに、こたへ若やかにして、うちそよめきてまゐるけはひ、物のうしろ、障子などへだてて聞くに、御物まゐるほどにや、箸、匙など取りまぜて鳴りたる、をかし。ひさげの柄の倒れ伏すも、耳こそとまれ。

物を隔てて向こうの動きを聴くと、女房とは思えない、召使を呼ぶ貴人の手をたたく音がひそかに品よく聞こえる。それに答える女房の声が若くて、そよそよと参る衣ずれの音がする。何か物の後や、障子等を隔てて聴くと、貴人はお食事を召し上がっているようで、お箸、匙をお使いになっている音が聞こえてくる。それには風情がある。

まず向こうから目立たないように手をたたく音が伝わって来る。大変上品そうな遠慮深い叩き方で、風情のあるように聴こえる。このような音によって、普通の女房ではないことを判断することができる。すると、向こうで行ったことをいろいろと推測するのである。食事の時の、音の違いによって、それぞれの食器をどのように使っているかまで、作者の興味・関心が引き付けられている。

夜いたくふけて、御前にも大おほと殿ごもり、人々みな寝ねぬるのち、外のかたに、殿上人などに物などいふ。奥に碁石ごいしの、筥けいに入る音あまたたび聞ゆる、いと心にくし。火箸をしのびやかに突ついた立つるも、まだ起きたりけりと聞くも、いとをかし。

(同右 三三〇頁)

宮殿の夜になって、中宮をはじめ多くの女房がそれぞれお休みになる。とはいえ、まだ休んでいない人も少なくない。外で殿上人と話している女房の声々や、奥の部屋で碁石を箱に度々入れる音、さらに、隣の局の女房がそつと火箸を突き刺す音さえも作者の耳にとまる。隣の女房の目立たないように軽く火を突き刺す火箸の音は、まだ起きていることを暗示している。作者はこのようなかすかな音に耳が引き付けられ、彼女たちが何をしているかと想像するのである。

隣の局に男がいる場合、作者はさらに耳を澄まして話の内容さえも知りたくなる。

人の臥したるに、物へだてて聞くに、夜中ばかりなどうちおどろきて聞けば、起きたるなりと聞えて、言ふことは聞えず、男も忍びやかにうち笑ひたるこそ、何事ならむとゆかしけれ

(一九〇段 三三〇頁)

真夜中に、作者は目が覚めて、隣の局からひそかに笑っている男の声が伝わってくる。「何の話か」と、作者の興味は引かれている。

おわりに

本稿は『枕草子』に描かれた音・声の一側面——「しのびやか(に・なる)」を用いる場面をめぐって考えてみた。『枕草子』においては、「しのびやか(に)」と「みそかに」「じのびて」との語意上の相違が見られる。即ち、「しのびやか(に)」は人を憚かって隠す意味ではなく、意識して音を立てないように、丁寧に細かく遠慮深く振る舞うことを意味している。そして、このような音声行為を褒め称える作者の姿勢——美意識が伺われる。

鈴木日出男博士は、秋山虔博士が指摘された『枕草子』における物事の捉え方がいかにも局面的であること⁽⁹⁾を踏まえて、「こうした宮廷的な美は、作者の信ずる観点から一面的、絶対的に捉えられているだけに、持続する人生や広大な世界にとつては極めて断面的ではないが、それだけにかえって観察を微細なものにして、感覚を鋭利なものにしている。この作品がすぐれて印象的・感覚的であるのも、そのためである」と説かれている⁽¹⁰⁾。

「しのびやか(に)」が取り上げられた男女の逢瀬の場面、女が古歌を誦じる場面、物を隔てて聞く場面についての分析を通して、まさに作者清少納言は鋭敏な感性の持ち主であることがうかがえる。その独自性について、以下の三

点にまとめることができよう。

一、男が音を立てないように振る舞うことなど、「しのびやか」な男女の逢瀬に関する内容を多く捉え、これを賞賛する作者の美意識が表し出されている。

二、女性が古歌を誦じるとき、「しのびやかに」を用いて形容することで、王朝特有の女性らしい柔らかさ、優婉さが表されている。

三、物を隔てた向こうの音が「しのびやかに」聴こえる。隔てた壁の向こうから発した情報を興味深く受け止め、そして想像を加える。このように往復して「しのびやかな」美的音響が呈されている。

注

(1) 大槻美智子「「みそかに」「しのびて」「しのびやかに」の語義と文章表現——『源氏物語』とそれ以前」(『国語語彙史の研究』十九、二〇〇〇年三月 国語語彙史研究会)

(2) 『類聚名義抄』第一巻・法上

(3) 『角川古語大辞典』(一九八九年九月 角川書店)

(4) 築島裕著『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(一九六三年三月・東京大学出版会)

(5) 使用した索引は以下のとおりである。

『日本対照竹取翁物語語総索引』(笠間書院) 『伊勢物語語総索引』(明治書院) 『土佐日記本文及び語彙索引』(笠間書院) 『大和物語語総索引』(笠間書院) 『平中物語 本文と索引』(語文社) 『落窪物語語総索引』(明治書院) 『宇津保物語 本文と索引』(笠間書院) 『かげろふ日記総索引』(風間書房) 『枕草子総索引』(右文書院) 『和泉式部日記総索引』(武蔵野書院) 『紫式部日記用語総索引』(日本学術振興会) 『源氏物語語彙用語総索引』(勉誠社)

(6) 引文は『新編日本古典文学全集 枕草子』(小学館) による。以下同じ。

(7) 松尾聡「先をしのびやかに短う」(『枕草子月報』一九八四年七月 卷二)の解釈に従い、「短う」を「低く」と理解させ

ていただく。

(8) 『新編日本古典文学全集 源氏物語6』三八二頁 注一〇

(9) 諸注いずれも決着していない部分なので、本稿は『新編日本古典文学全集 枕草子』(三〇二頁 注九)に従う。

(10) 鈴木日出男「枕草子の文体」(岩波講座『日本文学史 第2巻 九・十世紀の文学』一九九六年七月)